

## XIII 大阪陸軍幼年学校について

小林和美

### 1. はじめに

大阪城が立地する上町台地北端は、難波宮造営・大坂城築城にみられるようにその地理的特性から古代より重視され、明治維新以降も陸軍の軍用地となり第四師団の中樞を担った。難波宮・大阪城の時代に関しては、発掘調査・研究の進展により様相が明らかになりつつあるが、明治維新以降の近代の様相については、軍事機密や敗戦の混乱といったベールに包まれ、不明な点も多く、難波宮・大坂城の時代と同程度、もしくはそれ以上に様相がわからないといっても過言ではない。しかし新世紀を目前にして戦争関連遺物を中心に近代の遺構・遺物も注目され、しだいに様相が明らかになりつつある<sup>1)</sup>。今回の調査においても近代の遺物が出土しているが、小稿では大阪陸軍幼年学校<sup>2)</sup>（以下、3.を除き幼年学校と略す）に関する遺物の紹介を行い、当地における近代の様相解明の一助としたい。

### 2. 陸軍幼年学校とは

遺物紹介の前に、陸軍幼年学校とはどのような学校であったのか。また大阪陸軍幼年学校の変遷について簡単にまとめておく<sup>3)</sup>。

陸軍幼年学校とは陸軍の将校生徒となるために必要な素養を与える学校であり、年少時より将校教育を主目的としていた。明治3年（1870）、大阪兵学寮に横浜語学所を合して幼年学舎を設け、先進国の軍事知識吸収のための語学教育を実施したのが始まりとされる。明治5年（1872）に陸軍兵学寮幼年学

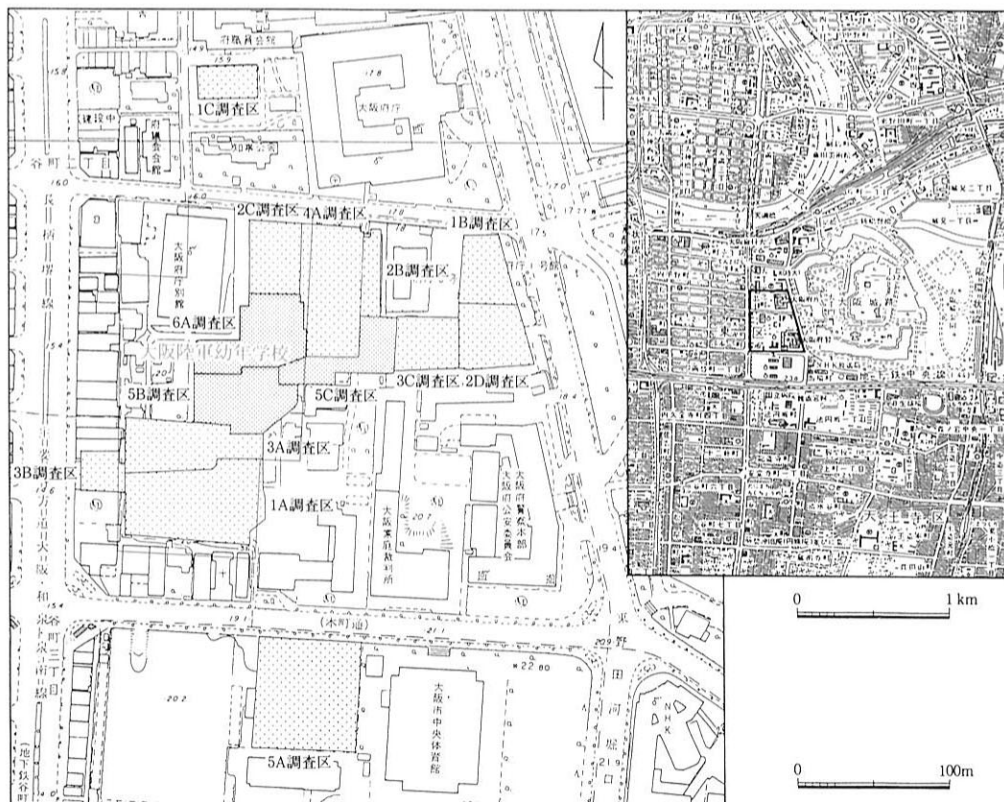


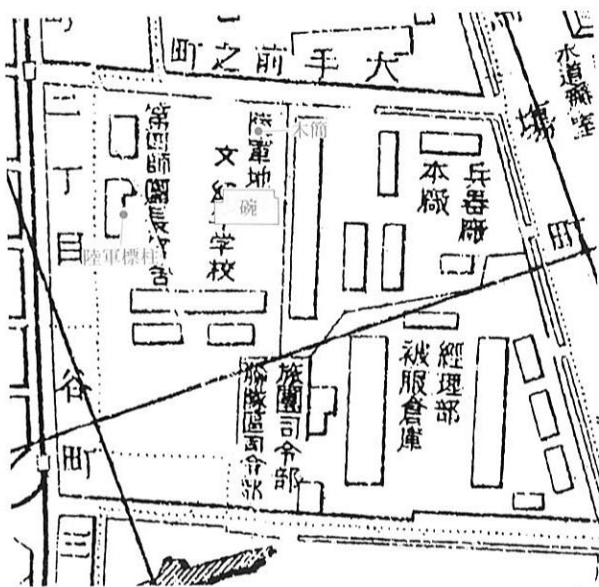
図4-XIII-1 調査地と大阪陸軍幼年学校

校に改組され、明治8年（1875）に陸軍幼年学校として陸軍兵学寮から分離独立し、陸軍省の管轄下に入り、陸軍士官学校の士官生徒となる幼年生徒を教育した。

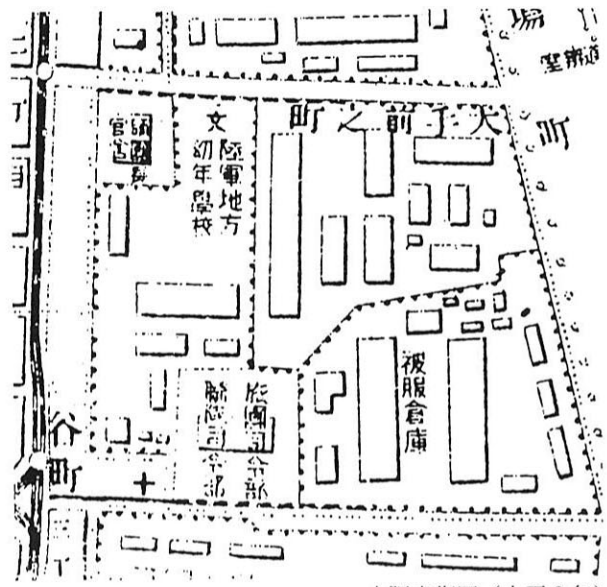
日清戦争後、軍備拡張に应ずるため、明治29年（1896）の条例改正により陸軍中央幼年学校1と陸軍

表4-Ⅲ-1 幼年学校関連年表

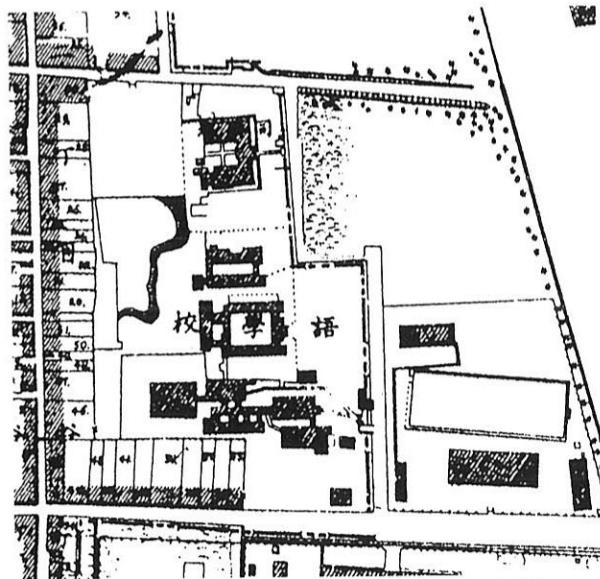
明治29年	(1896)	大阪陸軍地方幼年学校、創設
明治30年	(1897)	大阪偕行社内を開庁の後、歩兵第八聯隊営内の仮校舎へ移転
明治31年	(1898)	大阪市東区大手前町の新校舎へ移転
大正9年	(1920)	大阪陸軍幼年学校に改称
大正11年	(1922)	大阪陸軍幼年学校、廃校
昭和15年	(1940)	大阪陸軍幼年学校、再興（旧南河内郡千代田村）
昭和20年	(1945)	終戦に伴う陸軍復員要領により、解散



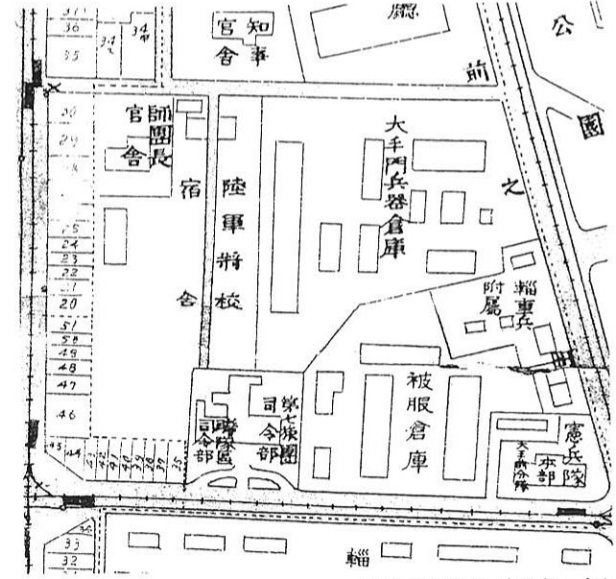
大阪市図（大正4年）



大阪市街図（大正3年）



内務省大阪実測図（明治21年）



大阪市東区図（昭和6年）

図4-Ⅲ-2 幼年学校関連地図

地方幼年学校6（東京・仙台・名古屋・大阪・広島・熊本）が設けられることとなった。各地方幼年学校は明治30年（1897）に開設し、13～15歳の生徒を各校50名採用した。修業期間は3年であり、将来、陸軍将校の基幹として大成するような英才教育を実施した。実際、卒業生の多くは、士官学校、陸軍大学へと進み、陸軍省の要職に就いており、幼年学校はまさにエリートコースの出発点であった。

大正9年（1920）、学校組織の改正により陸軍中央幼年学校は陸軍士官学校予科となり、各地方幼年学校は陸軍幼年学校と改称したが、第1次世界大戦後の軍縮のため、東京1校を残して他の幼年学校は逐次廃校となった。しかし、満州事変後の軍備拡張によって昭和11年（1936）以降、逐次復興し、生徒の採用人数も従来の2倍以上に増加した。やがて太平洋戦争の敗戦により、昭和20年（1945）8月30日に解散した。

### 3. 大阪陸軍幼年学校の沿革（表4-XIII-1）

大阪陸軍地方幼年学校は明治29年（1896）5月に創設され、大阪借行社、歩兵第八聯隊営内の仮校舎を経て、明治31年（1898）2月21日に大阪市東区大手前町の新校舎へ移転した。大正4年（1915）発行の大阪市街図や校内配置図によれば大手前通りに正門を構え、第四師団長官舎や第七旅団司令部、師団倉庫に隣接する敷地に校舎等が建てられていた（図4-XIII-2・3）。当地には明治22年まで理化学専門の高等教育機関である司薬場や英語学校が設置されており、元来、教育機関が密集する地区であったようである（図4-XIII-2左下）<sup>4)</sup>。

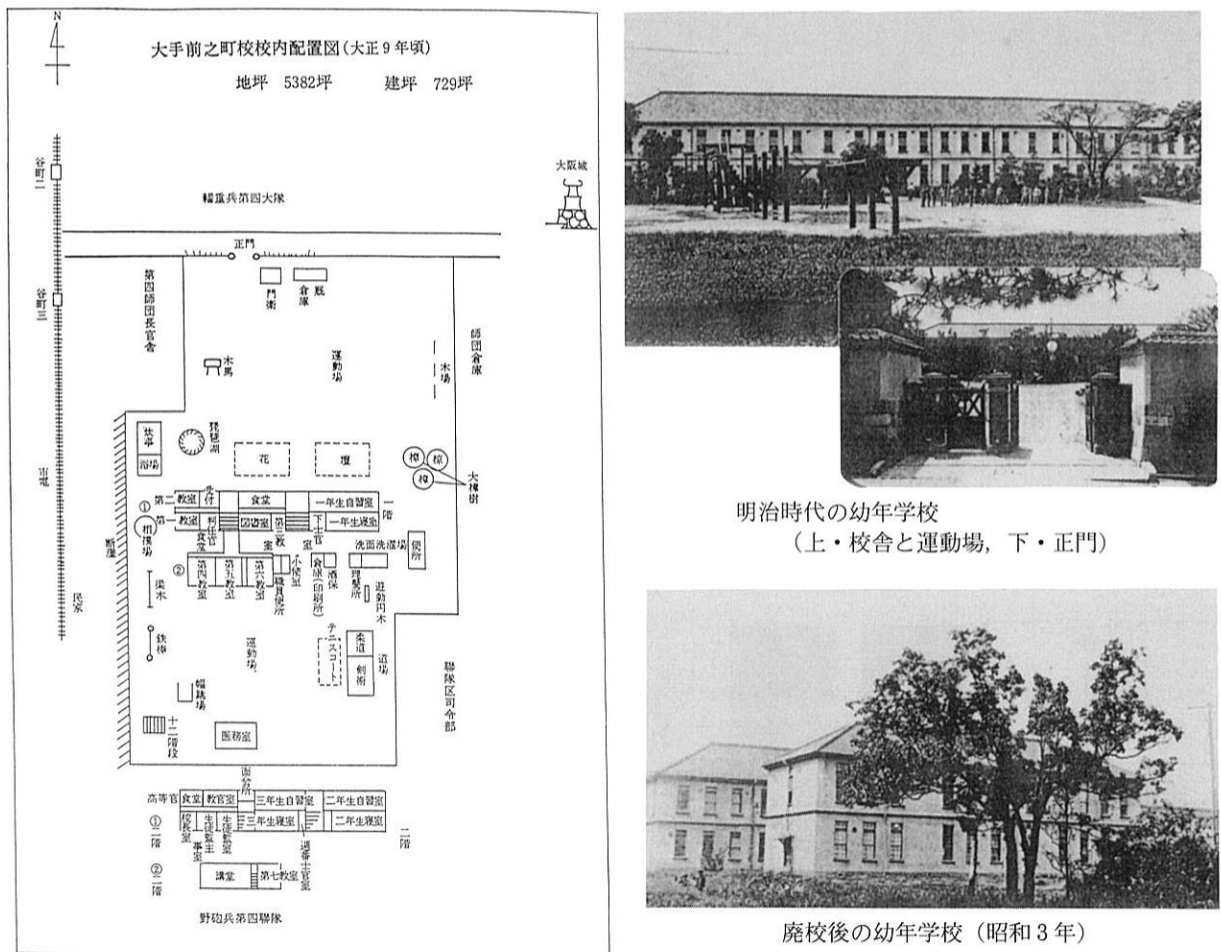


図4-XIII-3 幼年学校校内配置図と建物

大正9年(1920)8月、学校組織の改正により大阪陸軍地方幼年学校は大阪陸軍幼年学校に改称されたが、大正11年(1922)3月には廃校となり、当地における幼年学校の歴史は25年足らずで幕を閉じた。しかし、校舎はすぐには撤去されなかったようで、廃校後6年を経た昭和3年5月頃とされる校舎の周囲に草が生い茂った写真が残されている(図4-XIII-3右下)。その後、校地は偕行社社宅となり、昭和6年(1931)発行の大阪市東区図にも「陸軍将校宿舍」と記され、かつての敷地内に大手前通りと旅団司令部を結ぶ道路ができるなど幼年学校の姿を見ることはできない(図4-XIII-2右下)。

昭和15年(1940)には大阪陸軍幼年学校が復興されるが、新校舎は広い敷地を求めて南河内郡千代田村(現河内長野市)に開設された。

戦後、かつての幼年学校を偲び、卒業生らによって学校跡の記念碑が建てられたが、旧校舎の一部と旧官舎とを併せた地域が府庁用地とされたときに撤去されたらしく、また校歌にも歌われ幼年学校の象徴であった「大樟樹」の樟も姿を消し、幼年学校の記憶は風化の一途をたどっている。

### 5. 大阪陸軍幼年学校関連遺物

大正3年の地図と調査区の位置図を重ね合わせると、幼年学校の敷地には北から2C調査区・6A調査区・5B調査区・3A調査区・1A調査区が該当する(図4-XIII-1)。遺構としては確実に幼年学校関連と断定できるものはないが、遺物には校名が記された幼年学校に関連する遺物が出土している(図4-XIII-4)。

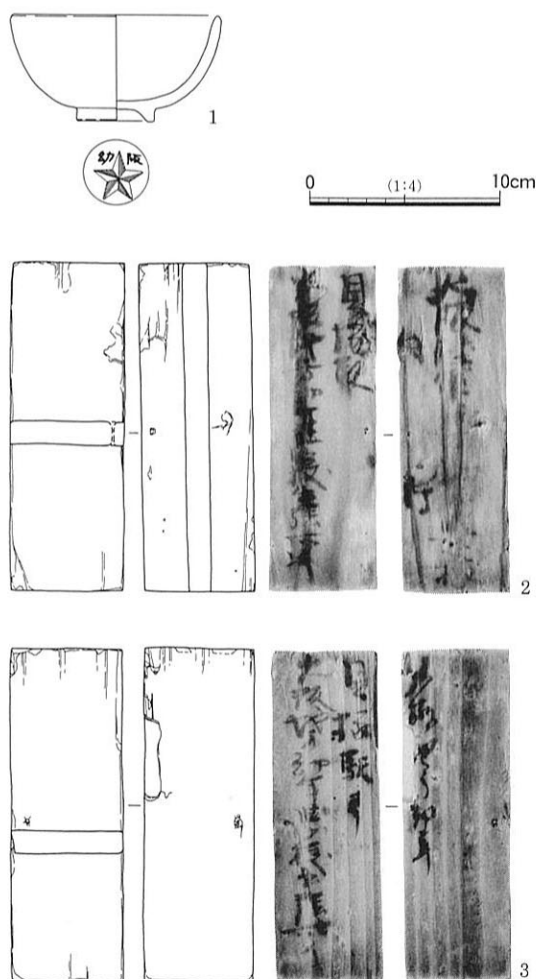


図4-XIII-4 幼年学校関連遺物

#### (1) 陶磁器

6A調査区の溝15と1・2層から軍徽章である星印をつけた茶碗が2点出土している。高台の内側に青色の星印と星の肩に「阪幼」とプリントされている。作りは貫入がみられ、後に大量に生産される陸軍食器にみられるような型作りではない。また星印も陸軍食器のものとは異なり、相対的に大きく突出部が細長い。さらに光の当たる部分と影の部分が交互になっており、影の部分も格子模様で塗りつぶされるのではなく、直線で塗りつぶされている。軍徽章とあわせて「阪幼」と記されていることから、幼年学校で使用されたものと考えられ、当時幼年学校は全寮制であったことから、このような茶碗が大量に使用されていたのであろう。

#### (2) 木簡

2C調査区の井戸10から幼年学校に関する記載がみられる木簡が2点出土した。2点とも18×6cmの方形の板に墨書で記されている。

- 2・「貝塚駅」
- 「大阪地方陸軍幼年学校出張所行」
- ・「大阪陸軍地方幼年学校」
- 「行」

- 3・「貝塚駅ヨリ」  
「大阪地方幼年学校出張所行」  
・「大阪地方幼年」

記載内容から貝塚駅から大阪陸軍地方幼年学校出張所に送られた荷物につけられた荷札と考えられるが、出張所の位置や荷物の内容に関しては不明である。しかし、幼年学校では毎年夏に「游泳及び漕舟一般の要領を修得させる」ため游泳演習を行っており、『大阪陸軍幼年学校史』の正史によれば明治36年8月15日の記述に「生徒一同游泳演習ノ為メ泉州貝塚へ向ケ出発ス（八月三十日生徒一同帰校ス）」とある。游泳演習は毎年実施されているが、貝塚で行われたのは明治36年のみであり、木簡との関連が想起される。

また、正史では明治39年以降の修学旅行や游泳演習など校外へ出かける記述には「生徒修学旅行ノ為メ校長以下職員生徒百七十名五泊ヲ以テ奈良県下高田、吉野、桜井、奈良地方ニ出張ス」や「生徒游泳演習施行ノ為メ校長以下職員生徒百四十名大阪府泉南郡樽井村ニ出張ス」といったように「出張」の言葉が頻繁に使用されている（傍点：筆者加筆）。

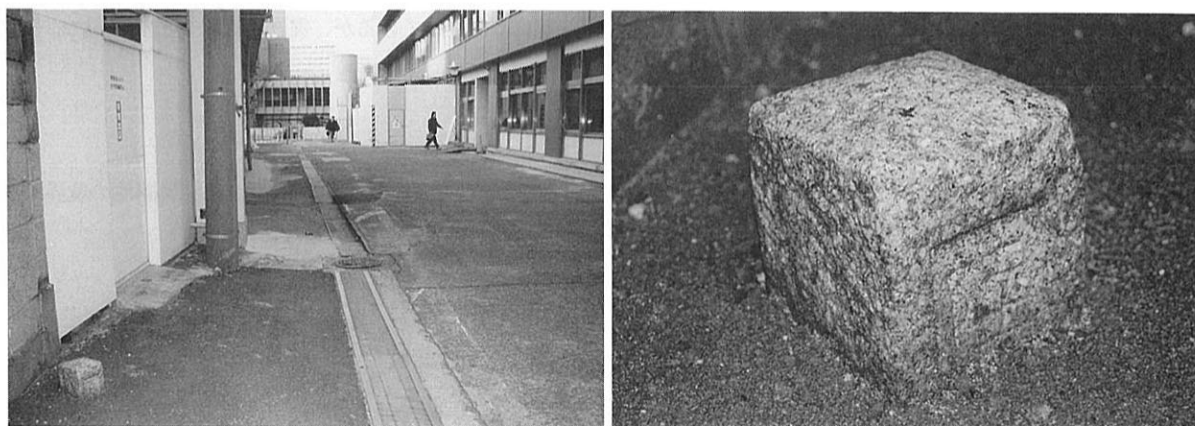
一方、「大阪地方陸軍幼年学校」と学校名に「地方」とついていることから、明治29年（1896）から大正9年（1920）8月までの間を示すと考えられる。

以上のことから、明治36年8月に貝塚で実施された游泳演習に関連した木簡である可能性が高いと考える。游泳演習には2週間ほど全校あげて校長以下100名以上の参加者がいるため、運搬すべき荷物も多かったであろう。

なお「貝塚駅」については、現南海電鉄が「貝塚駅」を設置するのが明治30年（1897）9月であり、また現ユニチカが工場に阪和線を引き込んで「阪和貝塚駅」を設置するのが昭和9年（1934）であることから、木簡に記されている「貝塚駅」は前者の現南海電鉄の貝塚駅と考えられ<sup>6)</sup>、上述の内容と齟齬をきたさない。

### （3）陸軍標柱（写真図版4-XIII-1）

大阪府庁別館南西隅（厳密には当センター大坂城事務所北東隅）に、「陸」一文字を残してあとはアスファルトに埋もれた石柱がある。石柱は15×15cmの直方体で、頂部は四角錐状に成形されている。南東側の面は幅9cm程中央部を一段下げて「陸」の文字が刻まれている。おそらく「陸軍用地」などの文字が刻まれ、陸軍の敷地境界を示す石柱と思われる<sup>7)</sup>。現段階では幼年学校関連のものか判断できないが<sup>8)</sup>、



南から撮影、右の建物：府庁別館  
写真図版4-XIII-1 陸軍標柱

近い将来、石柱が消滅することも考えられ、基礎データを提示しておく。

## 6. まとめにかえて—資料のもつ意味—

戦後半世紀以上の時が過ぎた大阪城周辺は公園と官公庁街が広がり、かつての軍用地の面影はすでに見当たらない。また歩兵第八聯隊や三十七聯隊のように隊に関係した人が多い施設は証言などが詳細に記録されているが、幼年学校はすでに述べたように少数精鋭のエリートを養成したため、関係者も少なく記録も乏しい。数少ない資料からうかがえる幼年学校の様相は、わずか13・4歳の生徒が日夜、ドイツ語・フランス語の習得や軍事教練に励み、エリート軍人としての第一歩を踏み出す場であった。小稿ではこのような情景を彷彿とさせるまでには至らなかったが、幼年学校の存在について考古学的証左を得ることができた。すなわち当地における明治から昭和にかけての土地利用変遷の一端を明らかにすることはできたと考える。

戦争体験者の高齢化と、戦争の記憶の風化が叫ばれて久しい今、人々の記憶にのみ留めておくのではなく、次の世代に伝えるため記録として残していく必要がある。その記録の手段の一つとして、発掘調査成果が語る声に耳を傾けることも意義があるように思われる。

## 謝辞

小稿を成すにあたり江浦 洋・尾谷雅彦・三浦 基氏よりご教示を賜りました。記して御礼申し上げます。

## 註

- 1) 財大阪府文化財調査研究センター 2000『難波宮跡北西の調査』  
江浦 洋・本田奈都子・小林和美 2000「陸軍大阪被服支廠跡の調査—大阪府警本部地点における近・現代遺構の発掘調査—」『ヒストリア』第171号 大阪歴史学会  
また大阪城周辺の戦争関連遺構・遺物については、大阪歴史学会企画委員会編 2000「戦争遺跡資料集」(大阪歴史学会 1999年度大会「戦争遺跡から見た近代大阪—大阪大空襲から55年—」当日配付資料)に未報告分も含めて集成されている。
- 2) 大手前之町に校舎があった時代は「大阪陸軍地方幼年学校」が正式名称であるが、一般的な用語として本稿では「大阪陸軍幼年学校」の名称を使用する。
- 3) 吉川弘文館 1993『国史大辞典』14  
阪幼会 1975『大阪陸軍幼年学校史』
- 4) 司薬場(舎密局)の発掘調査成果に関しては、本書考察編所収の合田氏の論考に詳しい。  
合田幸美 2002「舎密局関連遺構について」『大坂城跡発掘調査報告』I (財大阪府文化財センター)
- 5) 2点のうち溝15から出土している碗は、登録番号ごとの記録写真には写っているが、実物は確認できなかった。従って、1・2層(G19-b3地区)から出土した碗のみ掲載した。
- 6) 貝塚市教育部社会教育課 三浦 基氏のご教示による。  
臨時貝塚市編纂部 1957『貝塚市史』第2巻
- 7) 池田一郎・鈴木哲也 1996『京都の「戦争遺跡」をめぐる』つむぎ出版
- 8) 幼年学校と第四師団長官舎の敷地境界に近いが、京都の報告例などから見て陸軍標柱は軍用地と民間地の境界を示すことが多く、断定できない。

## 挿図・写真出典

- 図4-XIII-1 (財大阪府文化財調査研究センター 1996『大坂城跡の発掘調査6』)に加筆  
図4-XIII-2 大阪府立中之島図書館、大阪市立中央図書館所蔵地図に加筆・転載  
図4-XIII-3 『大阪陸軍幼年学校史』より転載  
図4-XIII-4 碗：新規作成、木筒：本書本文編図65より転載  
表4-XIII-1 『大阪陸軍幼年学校史』より作成  
写真図版4-XIII-1 新規撮影(2001年2月)